

# 幼童教育と童謡 (2)

葛原 菫

## A、覚え易い童謡と覚え辛い童謡

〔その一〕

それは、極めて簡單です。コドモに氣に入る童謡が、覚え易いのです。コドモに悦ばれる童謡が、覚え易いのです。

それでは、何んな童謡が、コドモの氣に入り、コドモに悦ばれるのでせうか。それは、まづ、

分り易い上に、

面白いもの

でせう。

それでは、何んなのが、分り易い上に面白いのでせう。

これには、簡單に答へられませんが、

1、コドモの生活に即したる内容であり、

2、コドモの氣持に合つた形態のもの  
であります。

更に、近頃の理想から考へますと、その時だけ、コドモの氣に入り、コドモを悦ばせたからこいつて、それだけで、

安心してをられません。その童謡が、それを與へられそれを歌ひ、それを遊戯し又舞踊してゐる時だけ、面白くて、

嬉しくて、悦ばしくても、コドモは、幸福ですが、それを反復する中に、おのづから何かを植サマシクえつけられて、成人

後まで待たないでも、小學校に入り、中等學校に進んだ時にでも、歌謡や、遊戯や、舞踊サマシクしてとなく、其の他の其

の何物サマシクを以て、そのコドモに正しく善く影響し得るものである事を、望みます。

童謡も、勸善懲惡や、修身例話めいた結びを必要としないので、それを讀み、それを聞いてゐる間だけ、面白くて、

嬉しくて、悦ばしくさへをれば、よいのもありますが、更に進んで、それ以外の何物サマシクを求められてゐると同じ

く、童謡にも、之を求めたいのです。

たゞへば、次の「雪」の如きは、

1、雪

小松耕輔氏曲

一、降れくくく さんく降れ

野山に降れ 庭にも降れ

真白い雪 休まず降れ

きれいな雪 さんく降れ

二、降るくくく さんく降る

野山に降る 庭にも降る

真白い雪 休まず降る

きれいな雪 さんく降る

(「大正幼年唱歌」第四集)

こいふのですから、「降れくくく——降るくくく」こいふに止

まつて、分り易いこいふ事他には、褒め様のない凡作です。たゞ、曲の面白さによつて、多少の存在価値はあるの

ですが、

雪は、野山に降る、

庭にも降る

休まず降る、

なごう、今更めいて、あげつらふこも無いのです。次のさんびになりますよ、形式は同じでも、多少、異なつた狙ひがあります。

2、さんび

梁田貞氏曲

一、こべ こんび 空高く

なげ なげ さんび 青空に

ピンヨロー ピンヨロー

ピンヨロー ピンヨロー

たのしげに 輪をかいて

二、こぶ こんび 空高く

なく なく さんび 青空に

ピンヨロー ピンヨロー

ピンヨロー ピンヨロー

たのしげに 輪をかいて

(「大正少年唱歌」第一集)

こいひますこ。

空高く―しかも、青空に、

こいふ事こ。

輪をかいて

こいふ事こが、明確になります。そして鳶が、朗らかに、ピンヨロー、ピンヨローこ、高鳴きして輪をかいてゐるのは、ほんまに、樂しげに、自ら悦んでゐるのでせう。のまかに―げに、朗らかに、そして、滑らかに、ピンヨロー、ピンヨローこ。まこまに、あの聲の澄んでゐますこ。

これは、この作曲者にまつても十數年前の傑作の一つであります、現にこの平凡な敘述で終らせなくて、もすこし、内容のある歌詞に改作したいこも、作曲者こ相談中でもあるのですが、しかし、此のまゝでも、曲の力によつて、役立つてゐる様です。

右二篇は、同じ形式に成るものですが、次の「お星様」は、(1)に近いもので、あまりに凡々であります。即ち、

お星様

梁田貞氏曲

一、ピカ〜 光れ 御空の星よ

きれいな色で のこらず光れ

小さな星も 大きな星も

空一面に ピカッ〜〜〜光れ

二、ソヨ〜 風が 御空で吹けば

きれいな星が のこらず光る

小さな星も 大きな星も

すどしい風に ピカッ〜〜〜光る

(「大正幼年唱歌」第七集)

でありまして、何の新発見もなく、何の特殊性もありません。第二節のいふところが、多少、詩としての面白味がありますか。

以上三篇は、第一節と第二節とが、全然、對立して、向き合つて、照應してゐるのですから、覺え易いこも、此上はありません。

〔その二〕

日本全國津々浦々にある古來、日本のほんまの童謡のこいはれてをる「夕やけ小やけ」があります。あれが、學校

や幼稚園の唱歌としては、あまりに、短かいといふので、

遠くの方の森へ、鳥も、喜んで歸るから、

私達も、早く歸りませうよ、暮れぬ間に――

さいふこを添へたのであります、幸にして、曲の冒頭が、あまりに能く知られてゐるものであります、が何さいふ事なしに、木に竹をついだ様にならないで、よく、まごまつた曲になつてゐるのは、作曲者の優れた技倆です。

夕やけ

小松耕輔氏曲

一、夕やけ こやけ

明日 天氣になれ

遠くの方の山へ

鳥が 喜んでかへる

二、夕やけ こやけ

明日 天氣になれ

歸りませうよ 早く

暮れぬ間に 早く

(「大正少年唱歌」第二集)

これは、幼児にまつて、歌ふ事を教へられるに先だつて、

耳にしてゐる「夕やけ小やけ明日天氣になれ」の句で起るさいふ事の爲に非常に親しみ易いものになつてをります。しかも、その曲が、その自然のリズムより一步も出でないので、苦もなく、つりこまれてしまふのです。あらゆる童謡に、この自然性を、曲の方でも、尊重したいものです。

〔その三〕

同じ二節から成るものでも、同一のものを歌つたにしても、既述の數篇の如く、對照でなくて、逐次敘述するものは、一般の敘事唱歌と共に覺え易いませう。次の『小さな鯉』にしても、それでありまして、

小さな鯉が、麩を食べかねて、水の表面に浮いてゐるのを、唯、つゞきまはしては、食べかねてゐる

さいふのです。それを二つに分けて、第一節では、「バクバクさつゞくさいひ、第二節では、「バクバク泡ばかりはいてゐる」さいふのです。誠に、分り易くて、面白くて、しかも、第一節の終りの「つゞきます」が、第二節を起す所の「つゞいてみても」に繋がりますので暗誦に、樂な事此上は

小さな鯉

小松耕輔氏曲

ありません。且つ又、修辭の上に多少の手心もしてありますのが、極めて有効に生きてゐるに信じます。即ち、

一、小さな鯉に 麩をやれば

大よろこび で よつて きて

皆で バクバク つまきます

小さな鯉……………

大よろこび……………

……………たべられぬ

……………たべられぬ

皆で バクバク……………

皆で ブクブク……………

この對照は、蓋し、幼兒にも、直接、明確には感じられないまでも、何みなき心易さミ落着ミを與へる事を信じます。又、

よつて きて……………

つゝいて みても……………

……………大きくて……………

の反復も、同じ働き方をします。

二、つゝいて見ても たべられぬ

麩は 大きくて たべられぬ

皆で ブクブク 泡ばかり

(「大正幼年唱歌」第二集)

のち、これに、更に修辭上の手を加へて、次の様にしました。即ち、第二節が、

たべられぬ

たべられぬ

ですから、第一節も、ミ苦しんで、やつミ

……………

……………

ミ、タ行の韻にだけ、整へ得たのでした。しかし、その不充分は、二節ミも末行が、よく揃ふやうに、

みんなで つよく バクくくく

みんなの あわが ブクくくく

みなしえた事を悦んでゐます。

乃ち、同じ材料でありますが、どちらが、幼児に歡ばれますか、廣く御研究も願ひたいところですが、題も、別々に

『小さな鯉』

『鯉』

しました。何れが、適切なのでせう。

鯉と麩

宮城道雄氏曲

小さな鯉に 麩をやるこ

大よろこび で よつて来て

みんなで つよく、バクくくく

つゝいて見ても たべられぬ

麩は 大きくて 食べられぬ

みんなの泡が ブクくくく

(「箏曲童謡」第一集)

## B、幼児の心を混亂さす憂のある童謡

「その二」

心を整頓さすなごといふ事を、童謡について考へるのは、純正な詩論からいつて、岐路に入るものですが、教育上、考へてみなくてはならない問題です。即ち、何よりの心の糧として與へらるゝ童謡の爲に、却つて、いろいろ意外な悪影響を與へられるものさへ有るに同じく、その内容、また、その形態が幼児向でないものがあります。多年、私共が排除しつゞけて來ましたところの、かの、あまりに哀調を帯びた感傷本位なものを初めとして、難解なもの、(用語に於て、内容に於て)大人趣味のもの、下品なもの、その他多くありますが、形式に於て、第一節と、第二節とが、あまりに相似てゐて、却つて、幼児の記憶に混亂を來すのです。これは、古來、よく用ゐられた修辭法でありまして、儀式唱歌などに、よくありました。

——かしこさよ、

——たふこさよ

の併用です。どちらも大體に於て同じ意味であります上、

同じ曲の所に、それが出て來ます爲に、却つて間違ふので  
す。童謡にしましても

——うれしいな

——たのしいな

を、同じ曲の所に出しては、却つて間違はれるのです。あ  
る學校の校歌に、

我が君の爲、國の爲、我が國體の基なる

の二句が、同じ曲の所に出ます。するに、幼兒は、嚴肅な  
式なきの時でも、間違つたものは、笑ひ出しますし、友が  
笑ふに氣のついたものは、その方を見ますし、一度、その  
經驗を経たものは、その所まで歌つて來ますし、「君の爲」  
か「國體」か、不安になつて、その前から聲は細くなつて  
しまつてゐて、妙な、エキस्पレッションに陥つてゐるの  
を、度々聞きました。

しかし、作曲家から申しますに、同じ節の場所には、同  
一の詞、少くとも、字脚も、アクセントも同じ詞を求める  
のでした。即ち、

同一曲譜により唱はるべき各節の同一行は、單に、そ

の總計的、字脚の均整のみならず、更にその小さき區切  
り方、(例へば 4 3、3 4、2 5 等に分るゝ如き) 及び  
音勢は勿論、語種の配合、語感、意味上の強弱、等も、  
なるべく一致すること

を求めるのでした。これは、尤もの事ですが、この爲には、  
特に、幼兒の童謡に於て、例へば、

金魚

梁田貞氏曲

一、 ゆら／＼／＼ ゆらり

あれ／＼ 金魚が泳ぐ

あんなに みごみな鱗をば そろへ

大きな金魚 小さな金魚

二、 ゆら／＼／＼ ゆらり

あれ／＼ 金魚が舞ふよ

あんなに きれいな振袖そろへ

大きな金魚 小さな金魚

(「大正少年唱歌」第三集)

の如く、同じ場所に、同じ言葉を使ふ事が一番、その要求

に適つてゐるのです。しかし

第一節が、泳ぐのであるから、鳍をそろへるのであり

第二節が、舞ふのであるから、振袖をそろへるのであ

る

に、判断してしまへば、難はありませんが、さて、

鳍をば、「みごこな」形容し、

振袖を、「きれいな」形容したのに、

何か根據があるかご申しますに、それは、残念ながら、

確固たるものではありません。それだけ、ぐらつきます。

そこで、同じ言葉は、別の節の所で出してみたり、同じ

でなくて似た言葉を、同じ節に出したりしてみたものがあ

りますが、これは、果して、紛れ易くて、困つてをります。

殊に、

風さへ吹けば、何時までも

風さへ吹けば、元氣よく

の如きは、その後が、全然同一であるだけに困ります。

風車

梁田貞氏曲

一、クルリ〜風車

休まず廻れ風車

クルリ〜風車

風さへ吹けば 何時までも

クル〜クル〜、クル〜クル〜

休まず廻れよ よく廻れ

二、まはる〜風車

クル〜クル〜 休まずに

まはる〜風車

風さへ吹けば 元氣よく

クル〜クル〜、クル〜クル〜

休まず廻るよ よく廻る

(「大正幼年唱歌」第九集)

この類に、次のがあります。まごに罪な事をしたに、

今更ながら、悔んでをります、「お芋」の方は

第一節が、竝んで

第二節が、ごちらも

第三節が、いくつも



だけの相違なのです。但し、これも、非常に細密に考へ、心理的に、此の順序は決めたのですが、一般には、それほど感じられないでせうしその必要もないのでせう、ミ、あきらめて、やはり、考へすぎたかと思つて、恐縮してゐます。

お辛ころころ

小松耕輔氏曲

一、お辛ころころ 大きい親辛

小さい子辛

竝んで ころころ

二、お辛ころころ 大きい親辛

小さい子辛

どちらも ころころ

三、お辛ころころ 大きい親辛

小さい子辛

いくつも ころころ

〔昭和幼年唱歌〕第三集

次の「日暮山霧」も、正に、これです。

第一節が、子兎

第二節が、子雉

第三節が、子鹿

です。これも、順序は、さうなつても、表現價値に甲乙はありませんが、唯、コドモに親しみの多い兎を第一にして、珍らしい鹿を最後にしたゞけの事です。

日暮山霧

梁田貞氏曲

一、日暮山霧 白い霧

谷一ぱい に わいてます

子兎 小徑が見えなくなつて

歸られないので 泣いてます

遠くへ遊びに下りすぎて

二、日暮山霧 白い霧

谷一ぱい に わいてます

子雉も 小徑が見えなくなつて

歸られないので 泣いてます

遠くへ遊びに下りすぎて

三、日暮山霧 白い霧

谷一ぱいにわいてます

子鹿も 小徑が見えなくなつて

歸られないので 泣いてます

遠くへ遊びに下りすぎて

(「昭和少年唱歌」第二集)

「お山の細道」は、曲の面白さに、小松氏のも、宮城氏のも、私自らも好きであり、全国のラヂオ放送にも、よく使はれてゐる曲ですが、

第一節が、狐ミ狸

第二節が、雉ミ兎

です。この四種の獸は、何んなに組合しても構はないのですから、それだけ、暗誦に不適當かミ、案じてゐます。

お山の細道

お山の 細道は

誰々通る 誰通る

小松耕輔氏  
宮城道雄氏曲

狐の親子の通る道

月夜に 狸の通る道

お山の お山の細道は

誰々通る 誰通る

山雉子雉の通る道

月夜に 兎の通る道

(「新曲童謡」「お山の細道」「箏曲童謡第四集」)

そして、兩氏の曲趣の相違も、非常に興味ある問題を提示してゐるものでありまして、何れも、レコードになつてゐますから、御きゝ下さい。一つは、靜かな山道であり、一は、愉快な山道になつてをります。

(次は、「幼児の心の整頓に役立つ童謡」)